
女の子の俺は俺で！？

御堺 橘月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女の子の俺は俺で！？

【Zコード】

Z0629BA

【作者名】

御弔 橘月

【あらすじ】

俺は『富永 優』(ミヤナガ ユウ)。

ある日、俺は新人類へと進化した！

……あ、いや新人類と言つてもニュー・ハーフとかじゃないんでー。別にこれといったスーパー主人公補正的な特殊能力とかもないんでー。

いや……まあ朝起きたら女の子になつてたつてことぐらいかな？

……えつ？ 充分特殊だつて？

ひよつ！ やめて／＼＼＼！ 恥ずかしいから讃めないで！

そんなこんなで幕を開けた優の波乱の日々はこれからどうなるのか？

拙作ですが良かつたらお茶でも飲みながらまつたりと見守つてやつてください。 1月5日、累計1000PV突破。皆様ありがとうございます。

プロローグ『田代あるじ』（前書き）

この物語はフィクションです。
実在する、人物、団体、固有名詞、名称、地名には一切関係ありません。

又、誤字、脱字を発見していただけましたら、報告していただけ
るとありがたいです。

プロローグ『田覚まし』

朝

ジリリリリリ。

けたたましい田覚まし時計の音と共に、彼、ミヤナガ『富永』コウ『優』の新たな一日が始まる。

「…………ふあー…………もう朝かー」

寝ぼけ眼で枕元に置かれた田覚まし時計を止める。

「つて！ もうこんな時間じゃん！」

時計の針はきつかり午前八時を指していた。

「くつそー！ 入学式でいきなり遅刻なんて『めんだ！』

優はベットから飛び起きて、急いで支度を始めようと、立ち上がりたが……。

「うわっ こてて……」

無意識に『身体の違和感』を感じ、バランスを崩し、ベットから転げ落ちてしまつ。再度立ち上がるひつとするが、何故かバランスがとれず、傍田からみるとその様子はまるで、生まれたての子馬が立ち上がりひつと、必死になつて見えた事だろう。

「なにこれ…？ ど、どうなつてゐの？」

そう。その優の視線の先には有り得ない物が、……男の子の優には有り得ない物が確かに有った。

遡ること四時間前

優の部屋には怪しい二つの人影があった。コソコソと忍び足で動くその人影は部屋の主に悟られまいと、押し殺した声でひそひそ話をしていた。

「……き、緊張するよマミー。」

「……全く。アナタが緊張してどうあるのよ。」

「だ、だって……」

「もうここまで来たのだから、ヤル時はやっちゃんさい！――アナタそれでも男？」

「わかったよ！――これでも僕も男の端くれだからね――ヤルとなつたらやつちゃうよ！」

「それでこそアナタ。流石私のダーリンね」

「……けど今更ながらコレって優君本人に了解取らなくていいのかな？」

「いいのいいの。言つたら絶対にこの子嫌がるでしょう？――それに

私達の子供なんだから何やつても平気よ」

「ははは……相変わらずマミーは手厳しいね。それでこそマミー。その手厳しい堪らないよ。」

「はいはい。……ほりひやしあひやとせひやこなさい。」

そんな会話をに行つてゐる声の主は『富永聰』と『富永要』。優の両親である。

そして何故、両親が声を押し殺してひそひそ話をしているのかと言つと、2人のその手に持たれた怪しい物体に理由が有つた。

試験管に入つた液体の“ソレ”はボコボコと音を立てて泡立ち、色は紫色という、毒薬にも見えるものだつた。

「遂に僕達夫婦の研究の成果が実るんだね！」

「ええ。さあその試験薬を優に注射しなさい

「フウツハツハツハ！ 我こそは狂喜のマッシュドサエンティス
ト！」

「ダーリン！ 大声出さないの！」

「え？ こういつのいらないつて？ つて痛い痛い！ 痛いよマリ
ー！ 注射器をお尻に射さないで！ アーッ！」

器用に小声で悲鳴をあげる聴であつた。

試験管から注射器へと移される“ソレ”は不気味な紫色の煙を上げる、試験薬とやらだつた。

「い、いいくマリー。」

「ええ」

緊張と期待の入り交じつた興奮を隠せぬ聴が、注射器を『ブスツ』と優の腕へと射し、紫色の液体が優の身体へと、吸い込まれるよつに入つていた……。

そして現在

「……あつー そつかそつか！ 僕はまだ夢を見ているのか！」

頭に電球マークと「ピンポン」という効果音が付きそつた程に見事に閃いた？（所詮現実逃避）優はなんとか立ち上がり、気にせずに顔を洗うために一階の洗面所へと向かう（優の部屋は一階）。その洗面所へと向かう途中も終始足元が覚束ない千鳥足で歩きつつ、階段へと辿り着く。手すりを掴みながら慎重に慎重に慎重に1歩ずつ階段を降りていくが……。

「ひけつー」

鶏の鳴き声の様な悲鳴（？）と共に転がり落ちていく優。

その中で重要な事に気が付く。……そう。男なら誰でもわかるであろう。恐怖を感じた時に縮み込む“男の子のシンボル”が無くなっている事に。

その時の優の顔といつたら、階段から落下する恐怖よりも、“男の子のシンボル”が無いことに気が付いて、奇々怪々とした表情をしつつ落下していくのであった。

「……いたたた……全くなんなんだよー 夢なんだから痛いのとかおかしいだろ！ ふざけるなよ階段ー！」

……つと余りに“男の子のシンボル”が無くなっている事に動搖したのか、意味不明なハツ当たりをしながら、未だに『これは全部

夢なんだー』と現実逃避をしながら洗面所へとやつとの想いで辿り着く。

「……つたく、なんなんだよ本当ー。今日で俺死ぬんじゃ……」

つと頭をポリポリと搔きながら鏡を見る。

「……えつ？」

優が固まる。

「……はつ？」

瞬きをたつぶつとしてから眼を『ジジン』と拭い、小首を傾げる。

「……？」

だが鏡に映る“美少女”も同じように小首を傾げるだけ。（当たり前である）

「えーっと……初めまして。」

ペコっとお辞儀をする優に“美少女”もペコっとお辞儀をする。（いや、だから当たり前だからね）

「……あ、今日はこの天気ですね？」

パニックのあまり、天気の話をし始める優。……だが洗面所から外は見えないついでに、今日は生憎の曇天である。

「あ、いきなりすみません。俺の名前は富永 優つて言います……つて……ハツ！」

「そつ。ここに来てやつと自分がどうなつているのか、気が付いた優であった。（いや、だから現実逃避だつて）

「そういうえば俺つて女の子だつたんだつけてそんな訳あるかっ！」

「こいつノリノリである。

「まあ女子になつたのは今は遅刻しそうだから一先ず、横に置いておくとして……」

「こいつなかなか大物である。

「よしハー、気合い一発！　洗顔しちゃいますか！」

何事も無かつたかのよつてそそくわと洗顔を始める優。なんと神経が図太いことが……。

「ふーつ。やつと曰が覚めてきた……つわつもう十分じゃんヤバい！」

洗顔後、時間を確認するために壁に掛けられた時計をチラツと見る。すると時間は既に8時10分となつていた。学園の登校時間は8時30分迄と決められていた為、その後は遅刻扱いになつてしまふ。

「まよい……早く着替えなきやー。」

だいぶバランスも取れるよつになつたのか、躊躇つになりながらも、なんとか階段を駆け上がり自室へと向かつ。

「えーっと制服はクローゼットの中だから……あれ？ そりいえば制服はどうすればいいんだ？」

そんな疑問と共にクローゼットを開くとそこには真新しい制服が掛かつっていた。

「…………なんだこれっ！？」

そう。なんと掛けっていたのは女子生徒用の制服だった。

「昨日は確かにちゃんと俺の制服が掛けたよな……？」そんな事を思いつつ、制服を観察していた時にふと、その制服の首もとのリボンに何かのメモが付いていることに気が付く。

「まつたく……どうせ姉貴がなんかのイタズラなんだろ……つたく

優の姉、『ミヤナガ宮永』凜。凜は優の姉であり、事あるごとに優に対してイタズラを仕掛けてくる事がある。

凜曰く「私は優君の事が大好きなのだ！ 取つて食べたいくらい大好きなのだ！」と、これまた『冗談なのか、本気で言つているのかわからぬ怪しい発言をしている。

今までに凜には様々なイタズラをされてきて、優は凜に対して常に警戒するようになつていて。

……そんな警戒心を嘲笑われたようで、悔しがりながら周囲を警戒しつつ、メモを手に取る優。

「えーっと……なになに……優君が眠っている隙に……」

そこには驚愕の事実が書かれていた。

それは

「優君が眠っている隙に、試験薬の実験体になつてもらつたんだけ失敗しちゃつた。てへっ！ それで優君は女の子になつちやつたんだ。お父さんは優秀だから失敗に備えて女の子の方の制服も密かに買つておいたんだ！ 流石お父さんだらう？ お茶目なお父さんより」

「えつ？…………なんだつて」「

色々とツッコマビシが満載だつたが、一先ず状況を整理しようと落ち着こうとしたが、今更になつて自分が“完全無欠の女の子”になつてしまつたことに、自覚し（どうやら大物ではなく鈍過ぎるだけのようだつた）、急いでクローゼットの全身鏡の前に立つ優。

「…………」

そして改めてマジマジと見ると、そこには驚く声を発したままの形で固まつた美少女が映つていた。

長く伸びた艶々の黒髪にキリつとした一重。それでいて鋭い目ではなく、クリつとした大きな目。肌はとても綺麗なシミひとつない真っ白な色をしているが、不健康には見えない程度にほんのりと赤く、見るからにきめ細かく、すべすべとしている。そして先程、優が驚愕していた男の子には有り得ない物……そう、それは胸であつた。その胸はこれでもか！ と言わんばかりの自己主張の激しい豊かな双丘がたゆんたゆんと揺れていた。

「うひこんな大きな胸してたらバランス崩すな……ははは……」

半ば呆れつつ、冷静に今までバランスを取れなかつた、大きな要因に気が付いた。文字通り“大きな”である。今までになかつた大容量の胸がいきなり付いていたら誰しも、平行感覚が崩れるであろう。自然と前のめりになり、これまで身体が無意識にバランスを取りつていだが、無意識の許容範囲を越えている為に、そのまま前方へと倒れてしまつのだつた。

そして今、この光景だけを第三者に見せて、その感想を一言で表すとするならば、まさに「姿端麗」の一言に叶えるだらう。

「嘘……だろ？　って嘘じゃないんだよなこれ。……よし！　確認の為にツネロウ！」

今までベットから落ちたり、階段から転げ落ちて、散々痛い目を見ているのにも係わらず、すがり付くような思いで両頬を思いつくりツネる。

するとどうだろ？ 鏡の中の美少女は苦痛に顔を歪め、今にも泣き出しそうな顔をする。

「いたーっ！　……ってそりゃそうか……」

どう考へても自滅行為を行つ優であつた。

そして美少女を観察していく、ふとあることに気が付く。

「…………ん？　よく見ると俺のど真ん中ストライクで好みな顔してるな……？」

優は今の自分の姿がかなり自分の好みな姿であることに今更ながら気付いた。

「……つてそんなことより、取り敢えずあのクソ親父の奴とつけちめてやるー！」

メモを破り捨てようとした優だが、メモの裏にまだ何か書いてあることに田を止める。

「なんだ？ まだ何か書いてあるな……」

「追伸、今の優君の姿は優君が心の中で一番綺麗だと思つ女の子の姿になつちゃつてます！ やつたね優君！ 後、お父さんとマリーは研究の為、今日から海外に行つちゃつから凜と一人暮らし頑張つてねー！ ちなみに優君の戻し方はわかりませんっ！ なのでパパーの親友の優君が今日から通う学園の理事長さんにはお話ししておいたから安心して女の子のまま通えるよん。戻し方わかつたらまた連絡するねー！ ばいびー！」

「なつ……！ ふざけるなー！ ばいびー！ つてなんだよー！ どんだけ軽い別れの挨拶だよ、あのクソ親父のやつ！」

「……つて、それより俺はこの姿のまま通うつてのかー！？」

そんなことをやつしているうちにとも、時計の針は刻一刻と進み続けている。

「あーつー！ もーつー！ とりあえず早く着替えないと」

そそくさと着替えを始めるが、なにぶん女子生徒用の制服など着た事がない為、手間取る優。

「ハハがじつで、じつちがじつなつてて……！」

そしてある一つの疑問に辿り着く。

「下着つてどうすればいいんだっ！？」

「くつ……どうせ今日は入学式だけだし、このままでいいよな？」

女の子になってしまっただけなので、勿論ブラジャーは付いておらず、下はボクサー・パンツという変な組み合わせである。仮にこんな姿を他人に見られたとしたら、喜ぶ人が多そうなので、困ったところもあるが……。

「うう……なんかスカートだからスースーするけど、多分これでいいんだよな？」

鏡の前でクルッと一回りをしてみる。鏡の中の優はスカートをヒラヒラとさせ、とても今日から女の子始めました！ というよつこは見えなかった。

「はあ……行つてきまーす……って本当に親父とお袋いないのか……」

…

玄関で通学用の学園指定の革靴を履きながら、両親の不在を改めて実感していた。

「とりあえず悩んでも仕方無いし、遅刻しないように学園に行かないとな……」

入学式への期待と自分が女の子になってしまった不安を胸に学園への道のりをひた走る優。

はあ……大変な事になつたな。

そんな優の様子を、物陰から覗く視線があることに、優は気が付いていなかつた……。

第一話『す、かじへおひめこやか』（前書き）

この物語はフィクションです。
実在する、人物、団体、固有名詞、名称、地名には一切関係ありません。

又、誤字、脱字を発見していただけましたら、報告していただけ
るとありがたいです。

第一話『す、かくへおひきでや』

私立天雲学園

この学園が今日から優の通う学園だ。

日本一のグループ会社である、天雲グループの学園であり、幼稚園から大学まである。総生徒数は四千人を越え、学園の総敷地面積は琵琶湖二つ分もあり、天雲グループ傘下のコンビニやレストランは勿論のこと、スーパーにショッピングモール、住宅やタワーマンション、はたまた天雲鉄道の駅までもが学園内にあり、その為、学園の敷地内はさながら1つの街であるかのようになっていた。

本年創立二十年目と、かなり歴史の浅い学園だが、日本政府より近未来型教育のモデル校に指定されており、教育は独自のスタイルを採用し、時代の最先端を行く最新の教育設備や、特待生制度（学業成績優秀者やアイドル、スポーツ成績優秀者の学費全額免除や専門家による個人指導）等も超人気校としての拍車をかけている。主に家柄の高い者や名だたる有力企業の子息、令嬢、芸能人などが通う学園である。

優の家庭は研究者の両親とそれに姉のごく普通的一般家庭であり、格段家柄が高い訳でもなく、はたまた会社を経営している訳でもない。

なぜ優がこのような学園に通う事になったかというと、父、聰の唯一無二の親友が天雲学園の理事長であり天雲グループの社長でもある『天雲 京』が多いに関係しているのは言つまでもないだろう。

今まで優の一家は両親の仕事の都合上、日本各地を転々としていた。

そして天雲学園のあるこの三谷市に来たのも、優が幼稚園を卒園して以来だろう。優はそれまでこの三谷市で生まれ育つた。天雲学園の幼稚園に通っていたが、優の幼稚園卒園と同時に両親の赴任が決まり、まだ幼い優と凜は両親についていくこととなつた。

その後も日本各地を転々とし、高校一年生となつたこの春、三谷市へと帰ってきたのだった。

「うわーなんか懐かしい景色だなー！」

生まれ故郷の景色を眺めながら学園へと走る優。優の家は天雲学園の敷地内にある、住宅街の一画にある一軒家だった。この一軒家は優の両親が結婚した時に建てた物で、建てたはいいが、日本各地を転々としていた為に、数年程しか住んでいなかつたのである。

「……はあはあ……やつと着いた……よし！ ギリギリセーフだ

息を切らせながら校門へと駆け込んだ優。時刻は八時二十七分と遅刻間際の時間帯だった為か、校門周辺の人影は既に疎らだった。そのままロビーへと向かい歩いていた所へ

「ちよっとそこのあるな」

優の背中へと掛けられる声。

だが優はその声に気付いていない。

「うわっ！ 銅像だー懐かしいなー！ この理事長の銅像とかによ

「イタズラしたつけなー

そんな幼い頃の楽しかった思い出を振り返りつつ、スタスタと口
ビーへ向かう。

その優の背中へ、今度は少々苛ついた高圧的な聲音でまたも声が
かけられる。

「ちょっと… セレのあなた！ 聞こえてこますでしょ？… こち
らへ来なさい」

その声にやつとじ気が付いた優は歩みを止め、声の主の方へ向
かって振り返る。

するとそこには一人のモデルのようなスタイルをした女生徒が立
っていた。

流れるような金髪のゆるふわな内巻きの髪型に、キリッとした鋭
い碧眼。ほわほわとした可愛い髪型とそのキリッとした顔付きのギ
ヤップはものの見事に“ギャップ萌え”というものを引き出していく
た。（その本人に自覚はないが）

「……えっと、俺に何か用ですか？」

「俺…？ まあいいわ。あなた新入生でしょ？」

全く何のかしらこの子。私が声を掛けても直ぐに気付いて
なかつたみたいだし、それに自分の事を『俺』って呼んでいたわね。
ちょっぴり変わった子なのかしら？

知らぬ間に彼女の中で、変わり者のレッテルを貼られていた優で
あつた。

「は、はい。そうですけど……」

「やつ。なりつこへりひしゃこ

やつ言ひと彼女は優に背を向け歩き始めてしまった。そのモデルウォーキングのよくな“可憐”な歩き方に見蕩れる優。

「ほら。何をしているの？　早く来なさい」

「あつ！　は、はこ！」

そんな背中をそそくさと追い掛けで行く優であった。

時を同じくして天雲学園理事長室

「ふむ……。聰の所の優君か。早く会いたいなー！　こんなちつさな時なんて一緒にキヤッチボールとかして遊んだし、今じゃそんな優も高校生かー。そもそもイケメンになっちゃってるのかな？」

部屋の広さは40畳程はあるつかといつ、大きな部屋の主『天雲モキヨウ』京は立派な椅子に座ったり、立つたりとソワソワと落ち着かない様子であつた。普段の彼を知っている者が見たら、あつと田を疑ひことであひ。

「あつ！　やうだやうだ！」

何かを思い出したかのように椅子から立ち上がり、『理事長』と書かれたプレートの置かれた机に向かつて歩き出す。

その机の上に置かれていたのは古ぼけた写真と2通の封筒だった。その手紙の差出人は優の父、聰だつた。

1通の封筒は既に開封されていた。その中身は古ぼけた写真だつた。

古ぼけた写真には仲良さそうに手を繋いだ少年と少女が写つていた。

「もうあの約束をしてから10年か……」

その写真の裏にはこのようない文が書かれていた。

『　10年後、優と美結を許嫁として再開させる　』

それは聰と京が交わした一つの約束を記した物だつた。

「今日は記念すべき日となるだろ？！　ハツハツハ！」

そう呟きながらもう一枚の未開封の封筒へと手を伸ばす。

こちらの封筒も差出人は聰だが、この封筒は今朝五時前に、聰、本人が直接、天雲邸へと持ってきた物だつた。その為、聰から手紙を受け取っていたのは天雲家の使用人であり、京は先程使用人からこの手紙を受け取つていた。

封を開け、手紙を読み進める京。その手紙には……このようない事が書かれていた。

「京久しぶり！　そしてすまん！　約束守れなくなっちゃつた。てへっ！　優に無許可で試験薬の実験したら失敗しちゃつて優くん女の子になつちやつたわー。それと優に伝えて欲しい事があるんだ。その試験薬の事と優におきた変化は一切口外してはならないって。実はまだその試験薬の存在は秘密なんだ。だつてこれから先、まだ

優にどんな変化が起こるか、僕にもわかんないんだよねーははは！死んだりはしないから安心していいよー。あ！後、京もこれ秘密にしてね？美結ちゃんと明日香さんには言つていいけど、それ以上はダメ、絶対。それじゃ一僕とマリーは解決方法探すために外国行つてくるね！優と凜よろしく頼むね。それじゃあばいびー！

口をワナワナさせながら、微動だにしない京。その目尻には涙が溜まつているように見える。

「あの馬鹿！うちの娘の婿になんつー」としてくれてんだああああー！」

その京の叫び声は校舎中に響き、後に『理事長』乱心事件と呼ばれたとか呼ばれなかつたとか。

所変わつて

この人、俺のことどこまで連れていくんだ？

優は金髪の生徒の後に付いて歩いていた。そして歩いていて気付いたことがあった。それは会う生徒、会う生徒が日々に金髪の女生徒へ向かつて

「おはよウジヤります芹副会長」
「おはよウジヤります芹さん」

「副会長おはよう」「やこまか」

「ねまよー芹さん。お仕事頑張つてねー」

「つおーー。芹様！ 今日も相変わらずお綺麗ですね！ 付きましたわー」

「下わー」

「おこわいのクズ！ 抜け駆けは許さねえぞー。芹さん。俺と付合こましゅうー」

と書いた具合で、そこかしこから声が掛けられていた。

その声に金髪の女性徒は一つ一つ丁寧に（？）……

「おはよー」「やこまか」

「おはよー」「やこまか。ありがとうございます。頑張りますよ」

「おはよー」「やこまか。腐れ死んだらどうかしらへ。」

と返事していた。

どうやら金髪の女性徒は学園の副会長のようだった。

そんな事を考えながらうつむきつつ、歩いていた優は前を歩いていた副会長が止まったことに気付かず、ぶつかってしまった。

“ボニコ” つという音が聞こえそうなくらい柔らかい何かに優の顔が埋もれていた。

副会長は田目的場所に着いた為、歩みを止め、後ろへと振り返ったその瞬間、優がうつむきながら歩いてきていた。優はそのまま副会長の“豊かな胸”へとぶつかっていた。

「……何をしているのかしらあなた」

「え？ ……ってうわあー」「、『めんなさい』。ちょっと考え方してたら……」

「……まあいいです。ではいらっしゃりで受付を行つて下わー。それ

と、申し遅れました。私は天雲学園、学生統率自治会副会長、芹・アレクサンダ・カレン・セリフ。それ・可憐と申します。これからも同じ一年生としてよろしくお願ひ

します。」

「あ、俺は面永 優つていいます。……つて同じ一年生！？」
「ええ。そうですよ？ 何か腑に落ちない点でも？」

あら。また俺つて言つてゐるわねこの子。男の子みたいで面白
いわ……ふふつ。

そんな彼女 可憐の中で今度は面白い子扱いされる優であった。

「い、いえ！あの……芹さんも一年生なんですね？ 今日入学式なのに、えーっと学生統率自治会でしたっけ？ それの副会長なんですか？ なんかおかしい気がするんですけど？」

「それは後々にご説明致しますので、先に受付をして下さいませんか？ 時間も差し迫っていますので」

なんかこの人の喋り方怖いな……。心の中でそんなことを思
いつつ、自分が連れてこられた場所が何処なのか確認しようと、辺
りを見回す。

するとどうやら事務室の受付に連れてこられたようだつた。

「あ、はい分かりました」

そんなやり取りをしていると、受付の方から事務員さんが名
簿を持ってやって來た。

「ひかりが前の記入をして下さい」
「はー」

名前の記入を済ませ、事務員さんから入学式の説明を受ける優。

「入学式は九時三十分から始まりますので、九時二十分迄には講堂

へとお入り下さい。後の細かい流れはこひらのプログラムで確認して下さい」

「分かりました、ありがとうございます」

無事受付を済ませた優は、横に立つ可憐へと話掛けた。

「それでさつきの話なんだけど……」

「あら、宮永さん。私にここまで連れてきてもうひとつありがとうございますか？ 私落ち込んじゃいますよ？ いいえ、やっぱり怒りますか？」

「…………ありがとうございます、『めんなさい』

黙りだ。俺、この人苦手だし怖い。それに絶対どうだ。……
そんなことを思つた優に対してもうひとつの決めていた。

面白いわねこの子。こんな可愛い目に見えた日なのに、喋り方はまるで男の子。それにイジつていて楽しいわ。これからも事あるごとに、いちゃもんを付けるしかないわね。……と言つ感じで可憐は今後、優のことをイジるつと決めていた。否、ストレス発散のためにしきりと決めていた。

「あのーそれで教えてもらつてもいいかな？」

「そうね……。教えてあげたいのは山々なのだけれど、もう9時15分よ。講堂へ向かいましょうか。その後にゆっくりと丁寧に教えて差し上げますよ」

その一言を残し、可憐は歩いていってしまう。

優はそんな背中を納得いかないような表情で付いて行くのだった。

そしてその優の背後に、優が自宅を出てから、ずっと付いてくる人影があることに、優は未だに気付かないでいた……。

第一話『は……ははははは』（前書き）

この物語はフィクションです。
実在する、人物、団体、固有名詞、名称、地名には一切関係ありません。

又、誤字、脱字を発見していただけましたら、報告していただけ
るとありがたいです。

第一話『あなたは誰ですか?』

講堂へと移動中

「芹さんって絶対俺のこと嫌いだよな……。」

優がそんなことを思いながら、可憐の後について歩いていた

…。

『ピンポンパンボーン。高等部一年生の富永 優さん。いらっしゃいましたら、一階、理事長室までお越しください。繰り返します……』

「あれ? 今呼ばれたの俺か?」

立ち止まって独り言の様に呟いたところで……。

「あら。富永さん。入学式早々に何か大変なことでも起こしたの? 理事長からの呼び出しなんて滅多に聞いたことがありませんね。それも入学式がもう始まるといつ、こんな時間に……」

「そ、そんなことしてませんって! けど参ったなー。あんなに頑張つて、遅刻しないように急いで来たのに、これじゃあ結局、入学式遅刻するじゃん……。はあ……」

「まあ、理事長からの呼び出しならば遅刻も許されるでしょう?」

「それは……そうかもしれないけど……なんか納得いかないなー」

「そんな不満そうにしないの。もしかしたらイイことかもしれないでしょう? 何事もポジティブに考えたりつかしら? 理事長室の場所は分かるの?」

「そうだね! 前向きに行くよ! 理事長室はわからないや……」

「理事長室はちゅうじゆこの上のフロアよ。そこ階段から上がつ

ておこきなさい」

「うそ。わかった。それじゃあ、また後でねー」

……優が階段へと向かおひとしたその背中へ、声がかかる。

「あら。高永さんひてもしかしてとてつもなく、お馬鹿さんなのかな
しら? 理事長室の場所教えてあげたのに、またもやお礼の一言も
ないの? 私どつても傷付きました。もうこれから高永さんのこ
と、徹底的にイジります。それでよくなり」

可憐は一気に捲し立て、最後に“黒い笑み”を浮かべ、優に背を
向け、スタッタと歩いていってしまう。

「う……なんかお腹いたくなってきた。あの人怖すぎなんよ……」

お礼を言わない優が悪いのだが……。

「はーーー早く理事長室いかなやせ」

言葉とは裏腹にアボトボと歩いていく優であった……。

そんなことを考えながら、理事長室と書かれた扉を“ノンノン”とノックする。

「京おじさん？ 優です」

少し間が空いて、扉の向い側から声が返ってきた。

「ゆ、優か。はいってくつえ……ゴホン……入つてくれ」と、声が返ってきた。

どうしたんだろう京おじさん？ なんか緊張してるのかな？ 久しぶりに会うからとか？ ……いやいや、あの京おじさんに限ってそんなことないよなー。うちのダメ親父と違って、冷静だし、“滅多な事”じゃ驚かないし。

優は学園に着いてからというもの、遅刻せずに済んだ安堵から、自分が女の子になってしまったことを完全に忘れていた……。

「失礼します」

ドアを開き、室内へと入る。

深々と丁寧にお辞儀をしてから京へと声を掛ける。 お辞儀をした際、優は長くストレートに伸びた黒髪が、邪魔になり“無意識”に片耳に掛けた。……その姿はまさに大和撫子と言われても違和感は無かつただろう。

「京おじさん。お久しぶりです」

「……」

だが京は何も喋らない。

「えーっと……あの……京おじさん？」

優は不安になり、京へと再度声を掛けた。

その時の優は不安からか、自然と少しうつむき、前のめりになりながら、ウルウルとした上田遣いで京を見ていた。

そんな優の様子を見た京は。

「ば……ばばばば」と言つながら固まつて、号泣していた。

なんてことだ！ 本当に女の子になつてしまつて……。それもこんなに美しくなつて。

全くあの馬鹿野郎は自分の息子になんてことしてやがるんだ……。美結との許嫁のこと、どうすりやいいんだ……。つたく。取り敢えず、今は黙つておくしかないか。

つと、京が心の中で様々な思いに、葛藤しているのを見た優は、そんなことは露知らず、京に何かあつたのかと思い、小走りで近づき、右腕へと抱き付いた。

そこで忘れていたことを思い出す。自分に胸があることに……。自分が女の子になつてしまつたことに……。

「……んつ……」

今の体勢は優が京の右腕に胸を押し当てる格好になつていた。そして優は今、『ノーブラ』状態であり、胸の“敏感な部分”が擦れ、妖艶な吐息を漏らしていた。

なんとも言い難い空気が流れ、優も京も一時停止状態に……。

そんな時、ノックも無く、いきなり理事長室の扉が開く。

「京さん。もう入学式で……」

そして今度は空気が凍る。

そんな中、扉を開けた女性が“カツカツ”と苛立ちを表したような靴音で優と京に歩み寄つて来る。

優と京は未だに動けず、そのままの状態で固まつていた。

「……京さん？ 人がわざわざ呼びに来てあげたのに……まさか、うちの学園の生徒に手を出していくなんて……。それもこんなに可愛い子に……。私という者がありながら浮氣するなんて、どうやら京さんは死にたいんですね？」

「ち、ちがうんだ明日香！ 話を聞いてくれ！」

「この期に及んで言い訳？ そんなの聞きたくありません！ うふふ。……私の乗馬用の鞭はどうでしたっけ？ ……あっ！ ありました！ ありましたよ京さん」

明日香が乗馬用の鞭を見付けて、一叩二叩と田の笑つていらない笑みを浮かべながら、京へと向かつてゆっくりと歩いていく。

そんな剣呑な雰囲気の中、やっと我に返った優は慌てて、京の右腕から離れた。そして、剣呑な雰囲気を発している女性へと話しがける。

「明日香おばさん、お久しぶりです。高永 優です」

「……はい？」

何言つているのかしらこの子？ といった訝しげな視線を向けられて焦る優。そこで京が事態の収集を行う為に、素早く動く（恐怖心から素早く動いているのは詮づまでもないだらう）。

「明日香。信じられないだらうが、彼……いや、彼女は本当に聴のところの優なんだ。」

「ええ。信じられません。言い訳をするならもう少し上手にこといいなさい。……覚悟は出来ているのよね？」

「ちょ、ちょっと先にこれを読んでくれ！ 今朝、聰から届いた手

紙なんだ！」

その京の必死な形相に、流石に何か訳があると思った彼女『天雲^{アマ}』
明日香（京の妻）は手紙を受け取り読み始める。

しばらくして、手紙から顔を上げ、優へと向かって歩いて行く。
…。優のことを抱き締める。

「大変だったでしょ？」「めんねおばさん、信じられなくって」「く、くうふしひです！」

「これから何か困ったことがあつたら何でもこいつてくれるのよ」

「明日香、優が死にそうになつてこるよ」「あらー、ひめんね大丈夫？」

「…………は、い……だいじょ…………つぶです」

「もつー……こんな可愛くなつち……つてー……」

「ありがとうござります？」「

「で、優君に話があるんだけど、いいかな明日香？」

「ええ。どうぞ」

「では優、先づこの聰から受け取った手紙を壇にも読んで貰いたい……」

先程の雰囲気とは打つて変わり、その真面目な京の表情に、優も
氣を引き締める。

「はい」

手紙を受け取り、読み始める優。その手紙に書かれていたことは
今朝読んだメモの内容と所々、重複していた。『約束』とか時々意

味のわからないことが出てきていたが、手紙を読み終える。

そして、メモに書かれていた内容に気付く。……どうやらこの試験薬のことに関する全てのことは口外してはならないらしい。

「試験薬のこととは秘密にしろってことですよね？」

「ああ……。どうやらそうみたいだ」

「正直、難しいですね……」

「まあ私達は口外しなければ問題は無いが、優の場合は当事者だからな……」

「俺のこと知つている人がいたらどうすればいいんですかね?」

「そうだな……そこはなんとか優にこまかしてもらつしかないな……」

「あ……あはははは。凄い無茶苦茶言いますね」

そんな無茶に思わず苦笑いする優。

「仕方ないだろ?」

「まあ、出来るだけやつてみますよ」

「私達も全力で優をサポートするから、何かあつたら遠慮せずに言ってくれて構わないからな」

「はい！ その時はお願ひします！」

「ああ！ 任せてくれ。それともう一つ私からお願ひがあるんだが……入学式まで、もう時間がないから、歩きながらで構わないか？ 京は壁掛け時計を見ながら優へと尋ねる。

「そうですね。もう時間もないですし」

そういうながら歩き始める3人。時刻は既に九時二十六分と、遅刻は確定しており、心の中で肩を落とす優であった。

再び講堂へと移動中

「それで話というのはこれから入学式で行われる、新入生の代表として、壇上でスピーチを行つて貰いたいんだ」

「はいっ！？ どうして俺なんですか？」

いきなりの申し出に、声が裏返つてしまふ優だった。

「優も知つての通りだが、この学園は幼稚園からある為に、殆どの生徒はそのままエスカレーター方式で進学していく。故に外部から途中受験してくる者を定員数の関係で全くと言つていゝ程、受け入れていないのが現状だ。今のうちの生徒達は他校の生徒と比べると、極端に限られた、既に出来上がった人間関係でしか、人付き合いと言つものをしていないんだ。それを少しでも変えるには高等部からうちの生徒になる優に、サプライズで新入生代表としてスピーチをしてもらうのが最善だと思つたまでだ」

「それは何となくわかりますけど……俺一人、入っただけで何も変わるものはないんですが？」

「私もそこまでの変化は期待していない。ただ、少しでも現状を崩せるなら、と思っているんだ。」

「わかりました。そんな大役、俺に出来るかわかりませんが、やりますよ」

そんな京の心配を聞いた優は、これから先、色々と迷惑を掛けるのは（全て優の両親のせいだが）目に見えている事だったので、少

しでも自分が役に立てればと思い、了承したのだった。

「そりゃ。すまないな優。それでスピーチの内容だが、こちらで既に原稿を用意しているので、ぶつつけ本番で読んでもらうことになる。……これがその原稿だ」

そういうて京が懐から原稿を取り出し、優へと手渡す。
原稿を受け取った優は、サラッと原稿を流し読みして、内容を確認した。

「了解です。スピーチの時の順序つて、俺の名前が呼ばれて、俺がそれに返事して、そのまま壇上に登つて、この原稿の通りスピーチをすればいいんですね？」

「ああ。それで問題無い。では頼んだぞ」

「はい。これから京おじさんには迷惑を掛けると思うので、これくらい朝飯前ですよ」

その言葉とは裏腹に、ガチガチに緊張している優だった。
緊張のあまり、いつの間にか講堂の入口に着いていたことに気づいていなかつた優。

「では、いくぞ優」
「……はい」

京が講堂の大きな扉を開け、理事長夫妻と遅れて入学式に登場する事となつた優。

講堂内にいた、全ての生徒の視線は、入学式の最中にいきなり開かれた扉へと向けられる。

「うわっ！ 皆口チ見てるよな多分……。滅茶苦茶緊張してきた……。駄目だ、ここで緊張なんてしてられないな。 よしつ。 気合を入れていつちょやつてやりますか！」

優は両頬を軽く“ペシッ”と叩き、それまでの緊張が嘘のように、優雅に講堂へと理事長夫妻に少し遅れて、入場していくのであった。
そして誰も見たこともない、大和撫子のような美少女の、いきなりの登場に、全員の視線が釘付けとなつたのは、言つまでも無いことだらう……。

第三話『ムネアル』（前書き）

この物語はフィクションです。
実在する、人物、団体、固有名詞、名称、地名には一切関係ありません。

又、誤字、脱字を発見していただけましたら、報告していただけ
るとありがたいです。

第三話『ムネアル』

講堂

講堂内へと一歩入った所で、優は立ち止まり、皆の視線が集まる中、両手を下腹部辺りで軽く握り、深々と優雅に、お辞儀をする。そんな優の姿は皆の目には淑女のように映つたことだろう。

皆、何が起きているのかわからないといった表情で、突然入ってきた美少女を凝視する。

そして優はたっぷり五秒程してから、ゆっくりと頭を上げ、喋り始める。

「『』のような大切な式に遅れてしまい、誠に申し訳ありませんでした。」

と言つた後、もう一度先程と同じように深々とお辞儀をする。そして皆が呆然と動けぬ中、優に向かって歩いていく人影があった。その人影はこの美少女のことを知っていた。
優が頭を上げるとそこには毎日見ている顔があつた。

「新入生の富永さんですね。こちらの席が新入生の席となつていま
すので、こちらに着席下さい。」

「は、はい」

少々引き攣つた笑顔で優が返事をする。

そしてその笑顔を見た相手の女性は“ニヤツ”と、不気味な笑みをほんの一瞬だけ浮かべ、優にしか聞こえない小さな声で、『妹になつた優君、めっちゃ可愛い!』と言つた。

そう。この女性こそが、優の姉の『富永』リンである。こ

の春から天雲学園で教鞭を執ることになつていた。

優は凜に促された席へと向かい、着席した。

そして凜も、教員用の席へと戻つていった。

2人が着席した瞬間、今まで水を打つたように静まり返つていた講堂内が、俄にざわめく。

そのざわめきの発生源は生徒達のひそひそ話であった。

「おい、なんだあのスゲー美少女」

「ミヤナガって呼ばれてたよな？」

「ミヤナガ？ 聞いたことないなそんな子」

「つてかそもそも、うちの学園にあんな可愛い子いたつけ？」

「わかんない！ 初めてみた」

「凄い綺麗な人！ 私のお姉様になつて欲しいな」

「うおー！ 僕はあの美少女を見るために今まで生きてたのか！」

母ちゃん生んでくれてありがとう！」

「よし！ 僕明日告白しに行つてくれるわ」

「俺も！」

と、いつた具合で男女問わず、そこかしこでひそひそ話が行
われていた。

姉貴のやつ、絶対後で『助けてあげただからちゅーして！』
とか言つてくるんだろうな……。

優が席に座つて心中でそんなことを思い、小さく肩を竦めていたその時。

「皆さん静肃にて！」

そんな声がスピーカーから聞こえてきた。その声は威厳に満ち溢
れ、聞いているだけで自然と落ち着くような安心感のある、京の声
だつた。

その声を聞いた生徒達はひそひそ話を止め、壇上へと視線を向けていた。

「先ず初めに私から、皆様へ謝らなくてはならないことがあります。理事長である私が、いかなる理由であろうと遅刻をする等、あつてはならないことです。それと、そちらの富永さんは私の用事を聞いてもらっていたが為に、遅れてしまつたのです。富永さんに責任はありません。全て私の責任です。誠に申し訳ありませんでした」

そういうながら京は深々と頭を下げ、謝罪した。皆、初めから遅刻してきた京や優を咎めるつもりもなく、ただただ優の美少女っぷりに騒いでいただけだったので、京が謝罪してくるのは予想外だったのだろう。その時には既に講堂内は元の、緊張感のある空気へと戻っていた。

流石京さん。私の旦那様は今日も格好良くて素敵です。

そんな盲目的な事を心の中で思う明日香であった。

その後入学式は何事もなかつたかのように滞りなく進んだ。

優の出番

司会進行の教職員が次のプログラムを読み上げる。

「 続きまして、新入生代表による答辞です。 新入生代表の

宮永 優さん」

「はい」

「檀上へとお願ひします」

優の名前が呼ばれ、優が返事をして立ち上がった途端、生徒達が“ビクッ”っと反応する。だが先程と同じようにざわめきは起らなかつた。

そんな中、優のフルネームを聞き、“数人の生徒”だけが、優のことを疑問を浮かべた表情で見ていた。

檀上へと登つた優は、皆の視線が集まる中、全く緊張した様子も見せず、小さく微笑んでから答辞を読み始める。

「 答辞。新入生代表、宮永 優。 本日は私たち 」

そして優の答辞は特に何事も無く、無事に終了した。 だがそう思つていたのは優だけだつた。

例年ならば、新入生代表となるのは成績最優秀者である、首席の生徒が行うことになつていて。けれど今回、その新入生代表に選ばれていたのは、いきなり現れた見たことのない美少女だつた。その為、新入生に限らず、在校生の生徒にまで顔と名前を覚えられてしまつた。このことは優にとっては致命的なダメージとなる。自分が女の子になつてしまつたことを隠さなくてはならない優にとって、目立つこと、相手の興味を惹くようなことは、素性を探られる大きな要因になるということである。

新入生代表がそんな生徒から選ばれているとは露も知らない優は、自分がルックスも相俟つて、皆の興味の的になつていてことに気付かなかつていていた。

ロビー

入学式が無事に終了し、講堂の外へと退場した優を待っていたのは大勢の生徒による質問攻めだった。

優の周りにはあつと言つ間に人垣が幾重にも出来ていた。

「ねえ君。高等部からこの学園に来たの？」

「新入生代表つてことはミヤナガさんは学年主席なの？」

「ミヤナガさんつて芸能特待生？」アイドル

「電話番号とメアド交換して！」

「一日惚れしました！俺と付き合つて下さい！」

「お前さつき明日告白するつて言つてたじやねえーか！抜け駆けすんなよクズ！」

一気に話しかけられ、何がなんだか分からず、優があたふたと答えられないでいるところ。

「笛さん！ 富永さんが困っていますよ？ その辺にしてあげて下さいませんか？」

「……天雲会長！？」

「我らが女神の天雲会長だ……」

「神々しい程に美しい！」

「俺やっぱり天雲さんが好きだ！ 付き合つて下さい！」

「お前どんだけ浮氣性なんだよ……」

そこに現れたのは優に勝るとも劣らない美少女だった。
そして優は思わず呟く。

「みーちゃん!」

みーちゃんと呼ばれた生徒は顔を真っ赤にして、慌てた様に優の手を掴み、置み掛けるように言つて、

「み、宮永さん! 理事長が呼んでいます! 一緒に来てくれますね! ?」

有無を言わせぬその雰囲気で、「ククク」と何度も頷く優。
そんな中周りにいた生徒達は口々に。

「みーちゃん?」

「今みーちゃんって言つたよな?」

「みーちゃんって……天雲会長のことか?」

「天雲さんとミヤナガさんってもしかして知り合?」?

「しかも天雲会長のことをみーちゃんって呼ぶくらいの中だと……?」

その生徒達の声が聞こえるよつ早く、優の手を掴んで走つて逃げていく彼女であつた。

理事長室前

走つて逃げている時に、大勢の人に見られちゃつたけど大丈夫だよね……？ そんなことを気にしながら、はあはあと息を切らせている彼女。

そんな彼女に、全く呼吸を乱していない優が尋ねる。

「どうしたのみーちゃん？ いきなり走り出すから、俺転びそうになつたんだけど……」
「はあはあ……ちょっと……待つて」

そういうながら理事長室の扉をノックもせずに、無造作に開ける彼女。そのまま理事長室へと何も言わずに入つていつてしまう。優はポツンと取り残されたように棒立ちしていたが、やがて声が掛けられる。

「早く入つてよ優！」
「う、うん分かつた。失礼します」

理事長室にはいると、彼女以外誰もいなかつた。理事長に呼ばれたはずなのに、理事長が見当たらないので、彼女へと尋ねる優。

「ねえ、みーちゃん。京おじさんはどこ？」
「入学式の後なんだから挨拶回りとか、してゐに決まつてるでしょう！ それに別にお父さんが呼んだなんて嘘だから！ それとその『みーちゃん』って呼ぶの、恥ずかしいからやめなさいよ！」

そんなことを全く悪びれた様子もなく言う彼女。 彼女は アマ 天クモ

雲美結。優の幼馴染で、天雲家の長女である。優が昔この学園に通っていた頃から、富永家と天雲家は家族ぐるみで仲が良かつた為、優と美結が仲良くなるのは当然だつた。幼い頃はほほ毎日と言つていい程に、二人で一緒に遊んだりしていた。そんな美結を十年振りに見た優は思わず、幼い頃のあだ名で呼んでしまつていた。

「嘘つて……。じゃあなんで俺のこと呼んだの？」

「優つてば！ それが久し振りに会つた幼馴染に掛ける言葉！？」

「えつ！？ ジヤ、ジヤあ久し振り！ ミーちゃん」

「だ・か・ら……『ミーちゃん』って呼ぶなー！ ばかばか！ 優のばか！ 私がどれだけ寂しくて、心配したか分かつてるの！？」

もの凄い剣幕で涙目になりながら、喚く美結に優は。

「……ごめん。ミー、美結。俺が悪かつた」

取り敢えず謝つていた。

「……………分かればいいのよ全く。これだから優は…………」

「えつ？ 『ごめん最後の方聞き取れなかつた。何？』

「なんでもないわよ！ いちいちうるさい！ それより優のその格好はなんなのよ！？ 声も女の子みたいな声してるし！ 髪だってサラサラなロングヘアーダし！ なんか馬鹿デカい偽乳付けてるし！ 今更だけどあんた本当に優なの？ それとも、まさか、優つてそんな趣味が有つたの！？」

どうやら美結は優が女の子になつてしまつたことをまだ、知らなにようだった。

優がどうやって説明しようかと悩んでいたその時 美結がいきなり優の両胸を乱暴に“ギュッ”っと鷲掴みにした。

「……いつ、痛いよ美結う……」

「……なつー?」

美結が茫然と立ち尽くす。だが手だけは優の胸を鷺掴みにして、離してはいなかつた。

「チョシトコウロレドウイカゴト?」

驚きのあまり、片言で喋り始める美結。

「コウニムネアル、コウニ、ムネアル、コウニ、ムネア……あ、ああ、あんた! ムネアルだつたのねー?」

「誰つー!? ムネアルつて誰つー!? 美結シッカリして! 現実に戻つてきてー!」

そんな、どこかにトリップしてしまつた美結を、現実に帰つてこそせよつと、美結の肩を揺さぶる優。その行いもあつてか、無事(?)現実へと帰還した美結であつた。

「……はつー! あたし今何してた?」

「なんか つてべ、別に何もなかつたよ?」

「そう? ならいいのよ。今なんだか夢を見てたみたいだつたから」「そ、そらなんだ……。どんな夢みたの?」

「なんか私がこいつやって優の胸を鷺掴みにして つて!」

再度、優の胸を鷺掴みにして固まる美結。今度はどけにもトリッ普しないようだつた。

「だから、そんなに乱暴に掴まれば痛いって! 離してよ美結う

……

そんな美結に涙目になりながら、離してほしいと懇願する優。会話を聞かなければそれは、傍から見たら美少女同士が馴れ合つているようにしか見えなかつた……。

「ちょ、ちょっと待つて優！ なんであんた胸ついてるのーー？」

そんな美結の問いに。

「俺、女の子になつちゃつたんだ

つと、サラリと答える優であつた……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0629ba/>

女の子の俺は俺で！？

2012年1月5日22時01分発行